

[成果情報名] 実エンドウ「紀の輝」の夏まき年内どり栽培における施肥方法

[要約] 早生で大莢の実エンドウ新品種「紀の輝」は、慣行より元肥を少なくし、追肥に重点を置いた施肥でL莢率が高く、初期収量が多くなる。また、窒素吸収量は、開花始めから収穫終了時まで同時期の「きしゅううすい」に比べて常に多い。

[キーワード] 実エンドウ、紀の輝、施肥量、窒素吸収量、夏まき年内どり

[担当] 暖地園芸センター・園芸部 **[連絡先]** 電話 0738-23-4005

[部会名] 野菜・花き

[分類] 指導

[背景・ねらい]

実エンドウ「紀の輝」は、早生で大莢の省力的な品種であるが、その栽培法は未確立である。そこで、養分吸収特性を把握するとともに、品種に適した肥培管理技術を確立する。ここでは、夏まき年内どり栽培において検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 栽培期間の施肥量を一定にした場合、元肥を慣行（10a 当たり N 成分：元肥 10kg・追肥 10kg）より多くすると、生育初期の花落ちによる着莢率の低下がみられ、収量が減少する（表 1, 2、図 1）。一方、元肥を慣行より少なくし、追肥を多くすると、総収量は慣行と同等であるが、初期収量が増加する。
2. 「紀の輝」は、「きしゅううすい」と比べて、L 莢率が高いが、むき実率は低い。元肥を多くすると L 莢率およびむき実率は低下し、逆に追肥を多くするとむき実率は慣行と同等であるが L 莢率は若干向上する（表 2）。
3. 慣行の施肥において、「紀の輝」は、「きしゅううすい」と比べて、茎葉、莢ともに乾物重が重く、乾物あたりの窒素含量については、一定の傾向が認められない（表 1, 3）。
4. 慣行の施肥において「紀の輝」は、開花始めで 10a あたり 3.1kg、収穫始めで 8.3kg、栽培終了時までには 20.0kg の窒素を吸収し、同時期の「きしゅううすい」の吸収量より多い傾向が認められる（表 3）。

[成果の活用面・留意点]

1. 連作地における施肥法として活用できる。
2. 元肥が少ないと、二次分枝の発生が減少し、生育後期の収量が低下する可能性がある。

[具体的データ]

表1 施肥の処理区

処理区	元肥	I	II	III	IV	
追肥重点	5	3.75	3.75	3.75	3.75	20
慣行	10	2.5	2.5	2.5	2.5	20
元肥重点	15	1.25	1.25	1.25	1.25	20

数値はN成分(kg/10a). 2005年9月1日播種.
 元肥;FTE入り豆元肥(6-8-6), 追肥;千代田化成(15-14-9).
 追肥は, 品種それぞれの開花始めから2週間おきに4回施肥.
 開花始め:「紀の輝」;10月2日, 「きしゅうすい」;10月14日

表2 「紀の輝」および「きしゅうすい」の
 施肥法と収量、品質

品種	処理区 施肥	収量(kg/10a)				L英率 ^Z (%)	むき実率 ^Y (%)
		11月	12月	1月	計		
紀の輝	追肥重点	302	331	108	741	78.4	47.7
	慣行	254	344	140	738	76.2	47.1
	元肥重点	146	295	198	639	73.9	44.5

きしゅうすい	慣行	203	356	113	672	67.3	50.0

2005年9月1日播種.
 「きしゅうすい」は, 2°Cで20日間の冷蔵処理した催芽種子を播種.
 Z: L英率=L英収量/総収量×100(%).
 L英は, 子実が4粒以上で極端な欠粒のない英.
 値は, 収穫時期を通じての平均値.
 Y: むき実率=子実の重量/英全体の重量×100(%).
 値は, 収穫時期を通じての平均値.

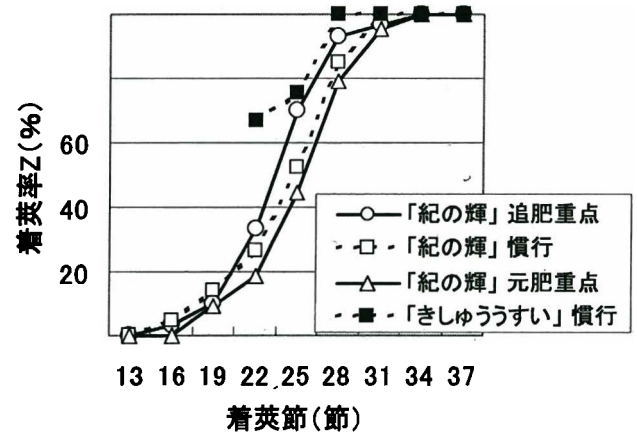


図1 施肥法が着莢率に及ぼす影響

注) 各区, 10株について調査.
 Z: 着莢率は, 開花したものうち, 収穫まで達した英の割合.
 値は, 上下3節ごとの平均値.

表3 「紀の輝」と「きしゅうすい」の慣行施肥時の窒素吸収量

品種	時期	乾物重 ^Z (kg/10a)	窒素含有率 ^Y (%)	窒素吸収量 ^X
紀の輝	10月 17日	107	—	3.1
	11月 8日	336	2	8.3
	1月 11日	502	173	20.0
きしゅうすい	10月 17日	69	—	2.4
	11月 8日	331	—	7.8
	1月 11日	405	163	15.7

2005年9月1日播種. 開花始め:「紀の輝」;10月2日, 「きしゅうすい」;10月14日.
 収穫期間:「紀の輝」;11月2日~1月10日, 「きしゅうすい」;11月9日~1月10日.
 元肥: 10-13-10(kg/10a, FTE入り豆元肥). 追肥: 10-9-6(kg/10a, 千代田化成)4回に分施.
 Z: 英は, それまで収穫した英の総重量. 未収穫の英は除く.
 Y: 窒素含有率は, 乾物あたり. 英は, 11月22日および12月20日に収穫した英の平均値.
 X: 窒素吸収量は, それまで除去した側枝および未収穫の英を含む.

[その他]

研究課題名: 産地いきいき健康エンドウ生産技術

予算区分: 県単(県基金)

研究期間: 2003~2005年度

研究担当者: 川西 孝秀・神藤 宏・森下 年起*・西森 裕夫*・東 卓弥* (* 農業試験場)

発表論文等: